

原爆文学研究会報

第3号

原爆文学研究会 二〇〇二年 八月

いつの頃からか、米国の貿易センター跡地は「グラウンド・ゼロ（爆心地）」と称されるようになりました。原爆の爆心地を指していた「グラウンド・ゼロ」という言葉に、新しいイメージが付されるようになったのです。

ビンラディン氏は、ビデオ発言の中で、原爆を投下して犯罪だと思わない米国は横暴だと述べ「原爆Ⅱ米国の暴力」の構図で米国を非難しました。米国がテロ跡地を「グラウンド・ゼロ」と呼ぶことは「原爆Ⅱテロの脅威」のイメージでビンラディン氏の発言に対抗しているように見えます。

二〇〇二年二月一八日の西日本新聞には「テロで崩壊 貿易センター跡地 「爆心地」 ツアー発売」という記事が載っていました。米国のある旅行会社が貿易センター跡地の見学を組み込んだツアーを発売したというものです。テロの犠牲者の遺族の声として「悲劇から利益を上げようという商売が出てくるのはたまらない」というものと「実際に見てもらわなければ破壊のすさまじさを分かってもらえない」という賛否両方が上がっていることが報じられています。

テロの跡地が観光地になってゆくこと自体は問題ではないでしょう。重要なのはそのされ方です。「原爆Ⅱ米国の暴力」と「原爆Ⅱテロの脅威」、どちらのイメージが共有されていくのか。それは、象徴

資本化が進む貿易センター跡地をどのような場所として意味づけていくかという「記憶の戦争」の行方によって決まることです。

第三回原爆文学研究会報告

二〇〇二年六月二十九日（土）九州大学六本松キャンパス内において「第三回原爆文学研究会」を開催、福岡県内外から約二百五十名が集いました。

中野氏の研究発表に続く質疑応答では、「原爆乙女」の物語化によって救われた人々もいたことにも目を向けた方がよい、同時代の原爆報道との関係にも注目した方がよい等の発言がありました。

長野氏の研究発表については、「元氣な被爆者」像が原爆の使用を正当化すること

につながるのではないか、しかし、原爆の悲惨さを強調することに差別の視点が介入しているのではないか等の発言がありました。

運営協議会では、本会の機関誌「原爆文学研究」創刊号の構成や形態について最終的な検討を行いました。



原爆乙女の物語

中野 和典（九州大学大学院生）

原爆の記憶を考えると、重要な存在として（「体験」を持たない）我々の前に現れるのは被爆者と呼ばれる人々であろう。被爆者は原爆と我々の間に在る。戦後、被爆者の中でも「妙齢」の女性は「原爆乙女」と呼ばれ、その象徴的な存在と見なされていた時期があった。彼女たちがそのような役割を担った背景には、ある物語化の作用が働いていたようである。どのような言説を通じて「原爆乙女」像は形づくられていったのか、それが原爆を記憶することによどのような影響を与えているのか。本稿ではマスメディア（主に新聞記事）において「原爆乙女」がどのように語られたかについて考察しそこに働いていた力の在りようを明らかにすることが発表の目的である。

「原爆乙女」が新聞紙上に登場するようになるのは、連合国軍総司令部による占領状態から日本が「独立」した一九五二年になってからである。戦後、被爆者たちは身体的・精神的な傷を負ったのに加え、就職や結婚の際に差別を受けることも多かったが、「原爆乙女」たちは疎外される一方で広く同情を寄せられる存在でもあった。人氣芸能人たちによる募金活動や東京・大阪・広島での治療、慰問や激励の手紙などを報じた記事が見られる。マスメディアを通じて知られるようになった「原爆乙女」の存在が、人々の同情を喚起し、

さらにそれを支援する動きが報じられることによって彼女たちの存在は広く知られるようになっていったようだ。そして、「原爆乙女の歌」の「戦争犯罪人」との合作（五三年二月）や、渡米治療（五五年五月―翌年十一月）の報道に見られるように「原爆乙女」は、許しと和解の機能を果たすものとして物語化されてゆく。

「原爆乙女」というと、はじめから「妙齢」の女性であったような印象を抱きがちだが、彼女らがマスメディアに登場するようになった一九五二年から、逆算して考えると、被爆したときには、まだ、その多くが十歳前後の少女であったことがわかる。戦争が終り、街が復興しても、少女達の負った傷は残る。原爆に関して後ろめたい思いをしていたのは米国人ばかりではなかっただろう。そのような場があつて「原爆乙女」は、他者を許し和解させる役割を果たす者として物語化されていった。問題は、その物語化によって生まれた形象である。「原爆乙女」像は、半ば周囲が期待し、半ば本人達が救われるために引き受けていったものであるが、それがあつていびつさを持つていたことは否定できない。

一九五四年三月に「世界」に発表された大田洋子「半人間」は、「原爆乙女」の物語を解体する物語である。神経を病み、癒されない者が「原爆乙女」たちも決して癒されぬと訴える不気味な語り。調和に到達することのない不安の物語である「半人間」が問題化していることは、「原爆乙女」の物語化をコンテクストに置き、それとの差異と抵抗に注目するとき鮮明に浮び上がるのである。

井上光晴「手の家」の問題

長野 秀樹(長崎純心大学)

表題となる井上光晴「手の家」(「文学界」昭和三五年六月)の抱える問題のうち、大きく三点を中心に論じた。読者の住む「現実」の世界と「虚構」を前提とする作品世界との問題。もう一つはその問題から波及する問題であるが、読者が持つ被爆者のステロタイプと登場人物の問題。最後に差別者と被差別者が逆転する構図についてである。

そもそも、原爆文学が原子爆弾という「現実」での出来事とそれによって、傷ついた被爆者が自らの体験を語るというところから出発している。原民喜や大田洋子、また永井隆もそうした出発点をなした人々である。そうした人々と違い、井上光晴自身には被爆体験はない。この作品の中にも被爆地の様子はまったく触れられない。触れられるのは、放射能の後障害の問題である。だが、その問題もまた、「現実」の被爆者の放射能障害の問題をもとにして作られている。昭和三〇年の新聞記事には、繰り返し、被爆者の放射能障害についての記事が見られる。

そうした記事を基にして、相互乗り入れする形で、「手の家」の作品世界は成立する。そしてそれは一面では、読者の持つ被爆者のイメージに寄りかかるところで成立する世界である。大西巨人のいう「俗

情との結託」はここにも明らかである。だが、井上光晴はそのまま、作品世界を閉じているわけではない。

作者の仕掛けの第一は流産の後、出血が止まらないという登場人物や、二人の子が早逝した登場人物を戦後、長崎から引き取られてきた孤児だと設定していながら、一言も被爆者であると断定しないことである。にもかかわらず、私も含めて多くの読者が彼女らを被爆者であると前提して作品を読み進めたに違いない。それはとりもなおさず、読者の中にある、ステロタイプ化された被爆者像を明るみに出すことを意味する。「長崎」←「流産」←「血が止まらない」←「白血病」←「被爆者」というコード化された図式に身を委ねている読者の怠慢には、読者自身が気づかねばならない。

また、ここに描かれる差別の図式も、特徴的である。一つは「隠れキリシタン」から「カトリック」への差別。もう一つは「島原」から「長崎」への差別。世界的に見れば圧倒的に多数者であるのは「カトリック」であるし、歴史的に見れば豊かな地域は「長崎」である。にもかかわらず、ここではそれぞれに前者が後者を差別するという逆転の構図が成立している。それは差別の偶然性・無根拠性を明かしてきているように見えるし、一方において、無限な差別の連鎖を示しているようにも見えるのである。

その他、発表の詳細は「原爆文学研究」創刊号所載予定の拙論を参照していただければ幸いです。

彙報

第三回 原爆文学研究会

○日時 二〇〇二年六月二十九日(土) 十四時より

○会場 九州大学六本松キャンパス

○内容 研究発表

原爆乙女の物語

中野 和典

井上光晴 「手の家」の問題

長野 秀樹

運営協議会

○懇親会 (十八時～)

機関誌 「原爆文学研究」 について

本研究会が年に一回発行する機関誌「原爆文学研究」について第三回研究会の運営協議会で合意されたことは次の通りです。

記

○題 名 本機関誌の題名は「原爆文学研究」とする。

○構 成 機関誌の構成は、基本的に「原爆文学」に関する批評、エッセイとする。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一、〇〇〇円を発行経費として出資する。

○配 布 執筆者には一〇部、それ以外の会員には二部ずつ配布する。

編集後記

本会の機関誌「原爆文学研究」創刊号もこの会報と同時に発行という運びになりました。三回の研究会の成果と新たに寄せられた批評やエッセイ、計一八本が収められています。昨年一二月の会の発足から、八ヶ月の時点で機関誌を発行することに、全く心配がなかったわけではありませんが、やはり思い切って出してよかったな、というのが実感です。ある問題に向い合うときに、十分な時間、十全の資料がそろふことはあまりないことです。いつも「もつと…があれば」と思いながら、少しでも力ある言葉を紡ごうとする、そのような取り組みから生まれる緊張感もあるように思います。

今、私たちはひとつの雑誌を創刊します。創る力と発展させる力はおそらく別のものです。この雑誌によって何かが大きく変ると思えるほど樂觀できる状況ではありませんが、「原爆文学」をめぐる諸問題と格闘しつつ言葉を発してゆきたいと考えています。(N)

※次回(第四回)の研究会は二〇〇二年九月一日(日)に長崎大学文教キャンパスにて開催します。詳細は案内状にて連絡いたします。

発行元 原爆文学研究会事務局

〒811-6520 福岡市中央区六本松4-2-1

九州大学大学院比較社会文化研究院 花田俊典研究室内

tel/fax 092-726-4597 e-mail hanada@rc.kyushu-u.ac.jp